| | | |
|---|---|---|
| １３ | お茶の水女子大学附属小学校 | 20～22 |

**平成２０年度研究開発実施報告書（要約）**

**１　研究開発課題**

小学校における「公共性」を育む「シティズンシップ教育」の内容・方法の研究開発

**２　研究の概要**

本校の構想する「シティズンシップ教育」は，「公共性」を育む取り組みである。本校で定義する「公共性」とは，授業づくりにおいて，「教師が，民主主義に基づく社会生活を創る資質・能力を育てる視点をもつこと。そして，友だちと自分の違いを排除せずに，理解し考える力を発揮する子どもを育てること」である。そのために，教育課程を，「学習分野」と「創造活動」で編成する。この３年間は特に「学習分野」の研究に焦点を当てる。教師が他者と共に子どもを育てる協力学年担任制では，発達的な課題から「公共性」を育む手だてを工夫し，実践する。教師の専門性を生かす学習分野担任制では，学習分野ごとに，「公共性」を育む「リテラシー」を明らかにし，『学びの概要』（リテラシーの系統表）を策定する。昨年度までの研究開発で，特に心とからだの発達のギャップが大きいことが分かった３～４年生を核としていく。これらの校内研究を持続可能なものにするために，教師の同僚性を形成しながら，研究体制のあり方を探っていく。

**３　研究の目的と仮説等**

**（１）研究仮説**

**①どのような手段を考えているのか**

**ア　協力学年担任制**

教師が他の教師と協力して子どもを育てるという考え方から協力学年担任制を採用する。

**イ　学習分野担任制**

全ての学習分野で「公共性」を育むことができるように，教科内容や方法を組み替えて「学習分野」を創設する。また，協力学年担任制で安定の基盤をつくった上に，教師の専門性を生かして子どもを育てるという考え方から，学習分野担任制を採用する。移行期である３年生は学年内の分野担任制を，４年生から完全な学習分野担任制を採用する。

**ウ　各学習分野で「公共性」を育むリテラシーを考える**

全ての学習分野で内容や方法を見直し，『学びの概要（シティズンシップ教育版）』をつくり，学習分野で育むリテラシーを明らかにする。　＊ただし，『学びの概要』は，名称変更を検討する。

**エ　「公共性」への意識を高める校内研究体制を構築する**

【「授業設計書」を作成する⇒授業者が授業研究シート（指導案）を作成する⇒授業研究シートを検討する⇒研究授業をおこなう⇒協議会で話し合う⇒自分自身のふり返りを行う】という授業研究サイクルを確立する。

**②どのような成果を期待しているのか**

**ア　協力学年担任制**

複数の学年担任教師が，一人一人の子どもに授業や生活指導で関わることによって，子どもにしてみれば，多面的な見方や価値観にふれることができ，精神的な安定感にもつながる。様々な教師の人間性や指導法に触れて，異なる価値観に関わる機会が増えるので，「公共性」を育むことへ促進的に働く。また，「公共性」の育み方を発達的な視点から考えて実践することができる。

**イ　学習分野担任制**

教師の専門性を生かすことによって，子ども同士が関わりあいながら創造的，専門的に学べる。また，各学習分野が「公共性」を育てるためのリテラシーを明らかにできる。

**ウ　各学習分野で『学びの概要』をつくる**

「公共性」を育むリテラシーを，６年間の視野から整理して，計画的な「シティズンシップ教育」

を行うことができる。

**エ　「公共性」への意識を高める校内研究体制を構築する**

自分では気づかなかった子ども同士の関係性の変化や，授業設計書の方針の具現化が不十分なことについて，他の教師の声を受けとめ，次の授業実践に生かそうとする姿勢が身に付いていき，教師の同僚性も形成されていく。

**（２）必要となる教育課程の特例**

教育課程を，「学習分野」（ことば，市民，算数，自然，音楽，アート，生活文化，からだ）と「創造活動」で編成する。

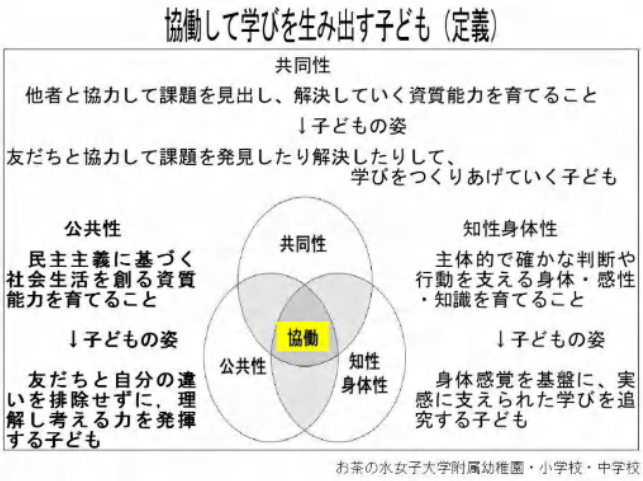
## ４　研究内容

**(1)教育課程の内容　－小学校における「公共性」を育む「シティズンシップ教育」の教育課程－**

社会科学系，教育関係の研究会でも，公共性やシティズンシップ教育という言葉が頻繁に使われ，解釈の仕方も多様である。そこで，私たちがこれらをどのように規定しているのか説明しておきたい。

**①「公共性」の定義は，附属幼・小・中３校園の連携研究「協働」から生まれた**

公共性という言葉を耳にすると，公共のマナー・ルールを思い浮かべる人が多いと思うが，実際には，さらに広い意味で使われている。新・教育基本法では，「公共の精神」という言葉が使われている。その意味を中央教育審議会答申（平成15年3月20日）から探ると，「21世紀の国家・社会の形成に主体的に参画する日本人の育成を図るため，政治や社会に関する豊かな知識や判断力，批判的精神を持って自ら考え，『公共』に主体的に参画し，公正なルールを形成し遵守することを尊重する意識や態度を涵養することが重要」とある。つまり，「豊かな知識や判断力，批判的精神」をもつことも「公共の精神」だと説いている。学習場面において思考判断力を育むことの大切さを説いていることが分かる。また，公共性は，「複数の価値や意見の＜間＞に生成する空間であり，逆にそうした＜間＞が失われるところに公共性は成立しない」（斎藤純一『公共性』岩波書店）と言われている。私たち教師も，「他者はだれでも自分とは違う」ことを前提にした教育を構想している。同時に，子ども自身もこのことを学ぶ必要がある。




このような問題意識にもとづいて，平成17～19年には附属幼稚園・中学校と文部科学省研究開発指定研究をおこない，「多様な他者と関わり，互いに触発しあい，協働して学びをうみだす子どもを育てる」ことを追究した。この連携教育においては，３つの側面から以下のように整理した。本校の「公共性」の意味はこの時に定義したのである。

**○「公共性」：民主主義に基づく社会生活を創る資質・能力を育てること（教師が育てる視点）**

**○「公共性」：友だちと自分の違いを排除せずに，理解し考える力を発揮する子ども（子どもの姿）**

詳細は，『平成19年度研究開発実施報告書　幼・小・中１２年間の学びの適時性と連続性を考えた連携型一貫カリキュラムの研究開発』（お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校）を参照していただきたい。

**②お茶の水女子大学附属小学校の考える「シティズンシップ教育」**

シティズンシップ教育は，「民主主義への完全な参加，批判的思考力，公正な社会づくりに向けた行動を市民に求める」教育と定義づけられている。現在は世界的な関心が高まり，国の数だけ多様なシティズンシップ教育が展開されている（嶺井明子『世界のシティズンシップ教育』東信堂から）。本校の教育は，多様な価値観が溢れる社会で，民主的社会を築く市民を育てる教育であるから，「公共性」を育む教育は，シティズンシップ教育を担うと価値づけられる。以上のことをまとめてみる。

**お茶の水女子大学附属小学校の考える「シティズンシップ教育」とは**

**お茶の水女子大学附属小学校が構想する「シティズンシップ教育」は，本校で定義する「公共性」を育むことである。「公共性」とは，教師が，民主主義に基づく社会生活を創る資質・能力を育てる視点をもち，友だちと自分の違いを排除せずに，理解し考える力を発揮する子どもを育てることである。＊「公共性」，「シティズンシップ教育」と「　」をつけて表記した場合は，本校の定義を表す。**

**③めざす子ども像の共有とそれをめざした教育課程**

今回の開発研究で，めざす子どもの姿は，「他者の異質性を評価・批判しあいながら関わる中で，他者の視点をもって自己を主張できる子ども」たちである。そのために研究内容として，ア：協力学年担任制，イ：学習分野担任制，のもとで「公共性」を育むことがあげられる。

**ア　協力学年担任制**　本校では，教師が他者と協働して子どもを育てるという考え方から，全学年で協力学年担任制を採用している。協力学年担任制では，複数の学年担任教師が，一人一人の子どもに授業や生活指導で関わる。子どもにしてみれば，複数の教師に指導されることで，固定的な見方をされず救われることが，精神的な安定感にもつながる。また，様々な教師の人間性や指導法に触れて，異なる価値観に関わる機会が増えるので，「公共性」を育むことへ促進的に働くと考えている。

**イ　学習分野担任制**　シティズンシップ教育では，道徳，特別活動，総合的な学習の時間などを核にして進める学校もあるが，私たちが選んだのは別の道である。教科内容・方法を組み替え充実させて「学習分野」を創設し，学校生活で子どもが最も長い時間を過ごす学習場面で「公共性」を育む道を選択した。ここでは，「異質なものとの関わりによる学習」を方法にした。

また，協力学年担任制で安定の基盤をつくった上に，教師の専門性を生かして育てる考え方から，学習分野担任制を採用している。移行期である３年生は学年内の分野担任制を，４年生から完全な学習分野担任制を採用し，子ども同士が関わりあいながら創造的，専門的に学べるようにしている。

**(ｱ)学習分野の特徴**

学習分野は，「教科」の目標，内容，方法を子どもたちの学びに合わせて柔軟に組み立てるようにして，「教科」の枠組みを緩やかにし，子どもたちの願いに応えて，学習内容を選定し，一人ひとりの学びの道筋を重視して学習を展開できるようにした。どの学習分野でも，他者との関わりあいを重視し，他者との葛藤が起きる場面を意図的に設定し，言語表現や非言語表現をも大切にし，「聴く」ことを通して「自分の考え方を見つめ直したり」しながら，「公共性」を育てるリテラシーを育てたい。学習分野の目標の中で，「他者との関わり」を意識している文言を示してみる。

【ことば】人との多様な関わりの中で思いや考えを伝え合い創り出す力を養う。
【市民】我が国の国土，歴史，そこで生活する人々の営みに対する見方・考え方を生かし，提案や意思決定の活動を通して，世界にも目を向けた責任ある市民としての資質を涵養する。
【算数】自分の考え方と友だちの考え方を比べ，実践を通して確かめ，数学的な見方・考え方を広げる。
【自然】より良い未来のために主体的に考え，科学的根拠を持って判断行動ができる。
【音楽】からだまるごとで音を感じ，受けとめる感覚を育てる。作品や演奏者と関わり，自分なりに楽しむ態度を養う。多様な音楽を仲間と共有する中で，互いの音楽世界を広げ，より豊かな響きを味わう。
【アート】造形的な表現活動を通して，身体感覚を活性化させ，ものを見る眼を養い，豊かな表現者を育む。
【生活文化】社会との関わりを考えながら，主体的に生活をつくり，未来を担う自立した生活者を育む
【からだ】仲間と関わり合うことを通して，創造的に運動を楽しんだり，健康なからだをつくる。

**(ｲ)各学習分野が「公共性」を育む「リテラシー」を明らかにする**

特設教科や道徳，特別活動，総合的な学習の時間などの領域・時間ではなく，全学習分野で取り組む。授業の中で，「違いを発見する」⇔「違いを排除しない」ことを螺旋的に繰り返せば，「公共性」を育めると考えた。そこで，「公共性」を育む「リテラシー」を考えることにした。

**ウ　「授業を改善するポイント」**

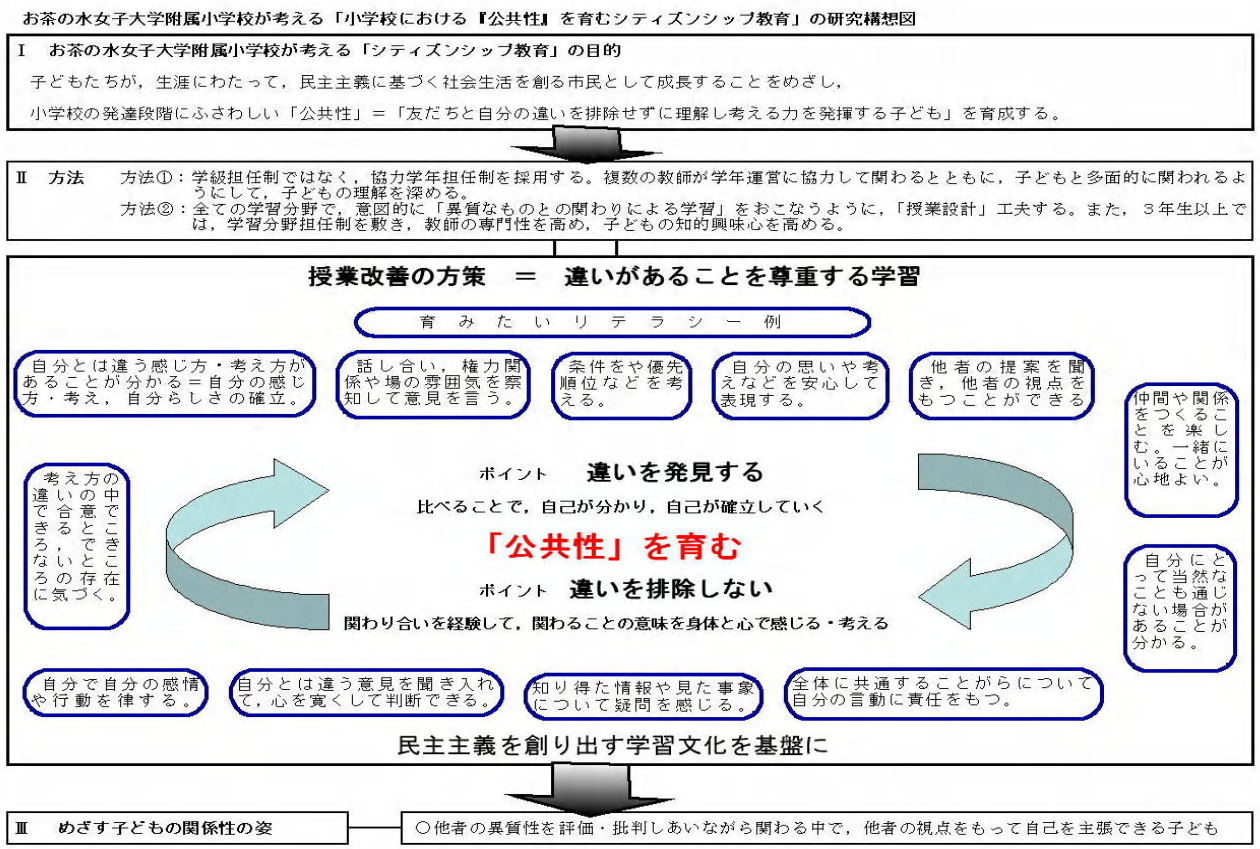
願うような子どもを育てるために，本校の教師全員が納得できる「授業改善の方策」が必要と考えた。「他者はだれでも自分とは違う」ことを前提として，「違いがあることを尊重する」ことを「授業改善の方策」の指針とした。その上で，「授業を改善するポイント」を明らかにすることにした。

次のページの研究構想図から，それらのことを説明したい。

**（２）実施した指導法の特徴**

**①協力学年担任制　　－子どもの実態をとらえ「公共性」を育む手だてを取る－**

この研究において，各学年の担任は，協力学年担任制を生かして，子どもたちの関係性の変容と教師の手だてを中心に考察した。大きな目標を共有しつつ，目の前にいる子どもたちにアクションを起




こすようにしてきた。ここでは，学級や学年の4月から1年間の子ども同士の関わりあいの質の変容を，教師がどのようにとらえたのか，各学習分野で育てたいことも関連させながら触れてみた。下の表には，各学年の担任が，子どもたちをどのように捉え，どう指導をしたのかの記録の一部を掲載した。今後は，指導した履歴から，「公共性」を育む工夫や手だてを一般化できるようにしていきたい。

| 学年 | 学級や学年の4月から半年間の子ども同士の関わりあいの質の変容　（11月に審議） |
|---|---|
| 1 | 自分なりの『ここ』という場はもてる子どもが多くなってきてた＝所属に対する安心感が生まれてきた。しかし，まだ「自分が言いたい」思いの方が大きく，「相手に理解して欲しい」とまではいかない。 |
| 2 | 学級での安心感（教師と，友だちと）が強まり，学級を越えた友だちを知りたくなりいっしょに遊ぶようになった。このことでコミュニケーションを磨く機会がふえ，自分で問題解決できるようになった。 |
| 3 | ４人のファミリー（生活班）での活動に意欲を示し，互いの意見を調整しながら，自分の役割を果たそうとするなど，責任感の芽生えが感じられる。さらなる公共性の成長のためには，活動の単位が拡大するとよい。 |
| 4 | 集団の中で，仲良しの友だちには反対できない発達過程にあるかもしれない。自分の意見をもとに話し合えるようになってきた。自他の共通点や相違点が分かり始めたからだろうか。人間関係が固定化し始める。 |
| 5 | 学級替直後の４～５月，子どもたちは自分の力を測り，６～７月，力関係が明確になり暗黙の序列ができる。２学期，誰にも長所短所はあるが対等だという指導が必要に。力関係を固定させない「公共性」の育成が課題。 |
| 6 | 友だちの行動を自分の判断基準にしているので，各自に判断の責任を感じさせたい。自分からアクセスして活動を創り出す子の存在と，みんなで考えた活動に参加しない子どもの存在が見られるようになった。 |

**②各学習分野が「公共性」を育む「リテラシー」を考える**

「リテラシー」の概念について，運営指導委員である小玉重夫（東京大学・教授）先生の講演をもとに説明する。「リテラシー」とは「文字の読み書き能力」のこで，教科を中心とする「教養型リテラシー」として発展した。1990年代以降のグローバル化，高度情報化社会の到来で，教養型リテラシ

ーは，PISAに代表される実社会での活用を重んじる「機能的リテラシー」が重要視されるようになった。本校でもこの考え方でとらえている。次に，各学習分野が考える「リテラシー」例を示す。

| 分野名 | 各学習分野が考える育みたい「リテラシー」 |
|---|---|
| ことば | ・意味の曖昧な言葉を曖昧にせずに質問する。<br>・同じ言葉に着目しても，人によって考えが分かれることを知る。<br>・決着つけがたい事態を知恵をだしあって話しあって乗り越える。<br>・自分の学習したことを，客観的に価値づける。（など，検討中） |
| 市民 | ・社会的価値判断力と意思決定力<br>・「社会を見る３つの目」が育つ。これは，①社会には一個人の工夫や努力で，できることとできないことがある。　②個人の利害と社会全体の利害は，必ずしも一致しないこと。③だから，世の中には，広い視野から社会を調整する仕組みが必要であるとともに，一人一人の工夫や努力が必要であること，という認識の仕方である。 |
| 算数 | 算数的想像力を育てる<br>①既習の知識や先行経験を「活用する」<br>②条件どうし，または条件と結果との「関係づけ」を見いだす<br>③問題解決の過程や結論を「見当づける」<br>④「操作や表現」活動を取り入れる |
| 自然 | ・仲間の中の自分として「どんな考えでも，みんなの問題を解決するのに役立つことがある」と感じる。<br>・仲間の見方として「少ない意見もよく聞いて，いい方法がないか考えることが大切だ」と感じる。<br>・「意見が合意できない場面」も存在することに気づく。 |
| 音楽 | ・他者の表現に対して共感する。または違和感を覚える。それが自分らしい表現につながっていく。<br>・違いがありながらも一緒に楽しんだり，よりよいものをつくっていったりするために，自分のアイディアを出しながら，他者のアイディアも受け止めていく。<br>・互いの表現を認め合う。 |
| アート | ・身体性：「個」の出発点として，自分自身が「からだ」で感じることを大事にする。<br>・自分らしさの追求：自分自身の思いや考えをもち，それらを表すことにこだわる。<br>・他者の尊重：他者の表現活動および作品などを尊重する。<br>・共感：相手の思いや表現に向き合い，共感的に受けとめ合う。<br>・相互交流：それぞれのよさを生かし合いながら刺激し合って高めようとする。 |
| からだ | ・ありのままをからだで感じ，受け止めようとする<br>・友だちの良いところを見つけ，お互いに生かしあおうとする<br>・友だちとの関わりの中で，自分の行動をコントロールすることも意識する<br>・保健…考えを言い合える，自分の考えを交流できる |

以上のように学習分野ごとに，養成しやすい「リテラシー」があることが分かってきた。

### ③　「公共性」を育む指導方法の特徴について

教師一人一人が，全体の研究主題を，自分の授業に関連させて主体的，具体的，実践的に考えるために５月下旬に「授業設計書」を書いた。その授業設計書に見られた指導方法の特徴を書き表す。

| 区　分 | 指　導　方　法　の　特　徴 |
|---|---|
| 低学年 | ・聞きあう人間関係づくりの工夫，小グループで自分が話さないとならない場をつくる。<br>・お互いの作品を見合い，表現のしたかの違いに気づく場を設定する。<br>・見つける⇒伝える⇒確かめるというサイクルでお互いの発見を共有する工夫する。<br>・自分も友だちも「一員」であることが意識できる共通体験（遊び，歌う）を意識する。<br>・想像力を働かせ，自分の言葉が他者に大きな影響を与えることを自覚させる場のもちかたを考える。 |
| 中学年 | ・自分に自信があっても，他者の言葉に耳を傾けさせる。<br>・本音で語り合える人間関係をつくりたい。<br>・責任をもって活動できるような自治的な取り組みを進める。<br>・自分の生きた軌跡である作品を大切にし，互いの良いところを見つける機会をもつ。<br>・根拠をもって価値判断できる場面設定型の授業に取り組む。 |
| 高学年 | ・多様な考え方が表れる場面を設定し，話しあいを多く取り入れる。<br>・一見間違えと見える解決方法から，問題解決に至る経験をさせる。<br>・友だちと考え方が違った場合，自分たちで判断する場面をつくる。<br>・帰属意識と責任感をもたせる小グループ学習の場を設定する。<br>・作品は，友だちの目に必ず触れる，声で読まれるものである。<br>・自分の学習を常に意識し，アウトプットする。<br>・その人らしさが認められる風土づくりをする。 |

11月には，半年間をふり返り，「授業設計」を書き直したところ，複数の教師が共通に指摘したこ

とがあった。「子どもの姿や，目標」で大切にしたいことには，「肯定感・有用感，自覚，自立，責任感」などで，授業の手だてでは，「子どもの自発性と教師の支援のあり方」を追求したいが多かった。

**（３）研究経過**　　＊下線部は重点項目

| | |
|---|---|
| 第一年次 | （１）「公共性」を育む「シティズンシップ教育」について定義し，各学習分野が考えるリテラシーについて協議した。<br>（２）「公共性」を育む「シティズンシップ教育」の視点から『学びの概要』に記した，学習内容，リテラシーなどを，授業研究を通して見直した。<br>（３）授業研究は，２年（１本），３年（２本），４年生（３本）に重点を置いた。<br>＊１年（１本），５年（１本），６年（１本）<br>■授業研究会<br>１回目　４年　市民　岡田泰孝教諭　「もう一つ消防設備を増やすなら」<br>２回目　２年　うた　近藤佳奈子教諭　「わらべうたであそぶ」<br>６年　自然　増田伸江教諭　「動物に食べられる植物ー生きものと養分ー」<br>３回目　３年　算数　榎本明彦教諭　「和算を楽しもう」<br>４年　アート　辰巳豊教諭　「イタリアのおもちゃ『電車が通りまあす！』」<br>４回目　１年　ことば　阿部藤子教諭　「『聞く』ってどんなこと」<br>４年　からだ　村上博之教諭　「ジュニアホッケー入門」<br>５回目　３年　ことば　松木正子教諭　「ちいちゃんのかげおくり」<br>６回目　５年　ことば　浅川陽子教諭　「最近のニュースから考えよう！」<br>（４）運営指導委員会を行い，学習理論や授業の実際について指導を受ける。<br>◎運営指導委員会<br>第１回　藤井千春先生　講演会「知識観，学力観，学習観の転換の必要性」<br>第２回　小玉重夫先生　講演会「シティズンシップ教育の実践的課題」<br>第３回　水山光春先生　講演会「英国におけるシティズンシップ教育と日本における展開の可能性」<br>第４回　三輪建二先生　講演会「シティズンシップ教育と省察的な授業研究」<br>第５回　藤井千春先生　水山光春先生　研究構想図について指導を受ける。<br>第６回　小玉重夫先生　水山光春先生　三輪建二先生　藤井千春先生（＊五十音順）<br>（５）講師の先生を招いた研究全体会を行い，指導を受けた。<br>○研究全体会<br>７月24日　小玉亮子先生　講演会「境界線を越える試みードイツにおける教育問題からー」<br>３月９日　松下佳代先生　講演会「『拡張する学習』や『パフォーマンス評価』教師の同僚性の構築について」<br>（６）教育実際指導研究会において初年度の発表をおこなう。 |
| 第二年次 | （１）一年次に明らかになった「公共性」を育むための「リテラシー」をより明確にし『学びの概要（シティズンシップ教育版）』の作成に取りかかる。<br>（２）教育基本法第14条の政治的教養の規定に従って「政治的リテラシー」を核にして学習分野を再編成することが本校の課題である（運営指導委員会でのご指導）。<br>（３）授業研究は，一年次から継続した３・４・５年生に重点を置く。<br>（４）上記（１）（２）（３）の実践を通して小学校教育で行うことが望ましい「シティズンシップ教育」の範囲を探る。また，学校外部との連携が必要な取り組みも視野に入れて学習活動を見直す。例えば，創造的な思考 力を養うために，「日本弁理士会」との連携授業を予定している。<br>（５）運営指導委員会は授業研究会と同日に行い，学習理論や授業の実際，評価方法について指導を受ける。<br>（６）教育実際指導研究会において二年次の発表を行う（平成22年2月開催予定）。 |
| 第三年次 | （１）二年次の基礎研究を元に作成した『学びの概要（シティズンシップ教育版）』を生かして，「公共性」を育む「シティズンシップ教育」の教育課程を実施する。<br>（２）「政治的リテラシー」を核に学習分野を再編成した上で，各学習分野の目標，内容，リテラシー，内容の取り扱いなどについて提言する。<br>（３）授業研究は，４・５・６年生（１年次の２・３・４年生）と３年生に重点化する。<br>（４）上記（１）（２）（３）の実践を通して小学校教育で行うことが望ましい「シティズンシップ教育」の範囲を明らかにし，学校外部との連携が必要なことや可能性について提言する。<br>（５）協力学年担任制，学習分野担任制のあり方を「シティズンシップ教育」との関連から提言する。特に３　年・４年生を核に提言する。<br>（６）運営指導委員会は授業研究会と同日に行い，授業の実際，評価方法研究の提言について指導を受ける。 |

| | |
|---|---|
| | （７）教育実際指導研究会において三年次の発表を行う（平成23年2月開催予定）。 |

**（4）評価に関する取り組み**

子どもたちに「公共性」を育む授業をおこなっていこうとすると，「話し合い」，「多様な考え方に触れる」，「友だちと関わりあって成果物を創作する」など，一つの単元や題材で，じっくり取り組むことが必要になる。このような学習の仕方は，量や数をこなしたりする学習を望む一部の保護者には不安をもたれがちである。そこで，本校の子どもたちには，どんな学力が育ちどんな学力が不十分なのか，手がかりを探ることにして，「他者との関わり方の意識調査」，「21世紀ＣＯＥプログラムの学力調査」という，二つの調査をおこなった。

**①「他者との関わり方の意識調査」を通して明らかになった本校児童の意識**

**○「相互独立的－相互協調的自己観尺度」（高田利武先生** 宮城学院女子大学教授**作成）の結果から**

**－『心理測定尺度集Ⅳ』（堀洋道監修　サイエンス社）より－**

意識調査には，他校との比較が可能で，かつ調査項目が本校研究テーマと関連がある「相互独立的－相互協調的自己観尺度」を選んだ。１０月に実施。対象学年は３，４，５，６年である。

他校資料（小学生５・６年生約2,500名）と本校５・６年生を比較した結果（５％で有意）から,本校の子どもたちは，「周囲の目を気にしない子＝マイペースで行動している子が多いが，そのわりには並はずれた勝手な行動はしようとしない」意識をもっていると総括できるだろう。

この調査結果を授業改善に役立てることが，今後の課題になる。

**②「21世紀ＣＯＥプログラムの学力調査」の結果から**　１０月に実施。対象学年は３年である。

今回の学力調査は，お茶の水女子大学が21世紀COEプログラム（2003年度採択）である「誕生から死までの人間発達科学」において作成した学力調査を使用した。この調査の趣旨は，「今日の青少年の学力の状況を新しい視点から把握するために，小学校，中学校段階を対象とした算数・数学，国語の学力調査を対象とし，分析を行う。測定する認知的能力について仮説を構築して問題を開発する。算数・数学については，アチーブメント・テストだけでなくパフォーマンス・アセスメントという視点を含む２部構成とする。国語においては，学習指導要領の内容に関わる問題に加え，音声言語も含める」となっている（『JELS　第１集』から）。この学力調査の結果から次のようなことが分かった。

**「『公共性』の価値を見いだす子ども」は,他の子どもよりも学力がやや高い。特に「聞く力」が高いことは注目できる。**

この結果に書かれた「『公共性』の価値を見いだす子ども」とは，下に示したように，本校独自の調
査の結果から抽出した子どもたちであることを補足する。

「『公共性』の価値を見いだす子ども」とは・・・。「友だちの考えと自分の考えが違う時にどうするか」という調査項目で，「相手の考えをもっとよく聞いて，もっと話し合ってみることが多い」と考えている子どもをはじめに選んだ。次に，その中から，その理由として，「友だちと自分の考えや意見をくらべて，違う部分はどちらの方がよりよいかを考えたり，似ているところをさらに考えて豊かにしたりできるから」と「全員が納得するようにしたいから」という両方の選択肢として選んだ子どものことである。３～６年生501名中72名いた。

**③　教師から見た子どもの変容**

各学習分野と各学年部会の研究の実践事例から子どもの姿をとらえてみた。

・考えを聞きあうことで,自分の考えとの違いに気づいたり,関心をもったりする姿が見られた。
・自分とは異なる考えも共感的に受けとめ,あるいは他者の表現を丸ごと受けとめる姿もあった。
・さまざまなグルーピングを通していろいろな考えと出あい,意見をぶつけ合う場をもつことで，本音で話し合う姿が見られた。

・意見がぶつかり合う中で，その根拠や過程を相手にわかりやすく表現しようとしたり，折りあいをつけたりしながら,お互いに分かりあおうとする姿が見られた。

## ５　研究の成果

### （１）実施による効果

### ①子どもへの効果

学年担任教師は，分野が違うことや指導観・教育観の違いなどからか，それぞれ子どもの捉え方が微妙に異なる。私たちは，その違いを埋めて同質化するよりは，違いを出しあって，子どもへのまなざしを複数化していこうという年間方針を固めた。担任各自の指導観を広げ深めるとともに，担任団として子ども多様な姿を共有して，指導に生かすという２つの願いが込められている。ここでは，第５学年の取り組みをもとに，「児童の実態のとらえ方と協力学年担任制」の関連を紹介する。これのＡ児の事例は，一人の子どもに着目する方法である。学習分野担任制だからこそ，日頃の子どもたちの情報を出し合い，子ども理解を進めることが重要だと考え，Ａ児に着目して書きためていった記録の一部である。

| Ｂ教諭 | Ｃ教諭 | Ｄ教諭 |
|---|---|---|
| ・昨年度から教えているので，Ａ児の印象は学習に真面目に取り組むが，**声を発することはあまりなく**，学習感想や自分の考えを書く場面では，**自分の考えを書くことが苦手**であった。<br>・今年度は，昨年度と違い，自分の考えをノートに書いている。字もすこしずつ丁寧になってきたように思う。学習に対して前向きになってきたことが，書くことにつながっているように感じる。<br>・１学期は市民係として，授業が始まる前に，地図を使ったクイズやゲームを積極的に行った。声を発することがほとんどなかった昨年度までのことを考えると，毎回必ず忘れずに活動には取り組むし，笑顔もよく見られている。 | ・４月の最初の日直で，Ａ児は**誰にも何も聞こえない朝のスピーチ**をした。**ものすごい早口と意味のわからない音**。子ども達の反応は「聞こえません」とは言うものの真剣に聞こうとはしていないようだ。そっと近くの席の子にたずねると「４年生のときもそうだったよ」。<br>・５月。一人で作文をみんなの前で読む。早口すぎるので，教師が背後にまわり，同じ行をゆっくり読むように声を重ねてみた。Ａ児の背中はびっくりするほど熱いし震えている。最初私は小さい声で重ねていたのだが，Ａ児はいやがらないようなので，少し声を大きくするとＡ児の声も大きくなった。聞いている子たちは，おやおや？という顔をしている。みんなに聞こえたおかげで，初めて「質問！」の手が挙がり，質問してもらえた。だがＡ児は下を向いていつものようにそそくさと席にもどった。<br>・６月，創造活動でＩ児と二人で「畑に行っていいですか」。後で教師が様子を見に行くと，大きな石を動かしてアリのあわてふためく様子を見て興奮し大きな声をかけあっている。こんなに敏捷なＡ児を初めて見た。<br>・６月末，インド転出する子のお別れ会の司会にＡ児は立候補した。まわりの子が「先生！Ａ児が司会やるって，言ってるよ」と代弁してくれて，「そうなの，やってくれる？」と意思をたずねると，こくりとうなずいた。やる気を見せてくれるようになって，うれしい。 | ・１学期当初課題に一生懸命に取り組んむが，**発表の場面になると，ややおどおどした様子**で，**声も小さく，ほとんど何を言っているのか聞き取れない**こともあった。<br>・１学期後半，自学で気象の研究をしていたＡ児は，自他ともに，天気や雲に詳しいと認められていた。発表ではまるで別人で，内容的にも専門性でも他の班を圧倒した。Ａ児の活躍で，班の発表が絶賛され，Ａ児は今まで以上に自信をつけたようである。<br>・それ以降，休み時間になると，自分から話しかけてくるようになった。「気象クイズ」や「10種雲型」「閉塞前線」など，非常に専門的な話題だが，周囲もそれに混ざり，Ａ児を中心にした「にわかコミュニティー」の形成が見られた。 |

５年当初のＡ児は，自分の考えをたぶんもってはいるのだろうが表現できず，表現すべき場で自信がなくおどおどしてしまうなど，心配な点がたくさんあった。しかし，Ａ児が「変わってきた･･･」という話が１学期後半ころに出てくる。例えば，人前で何かをすることが苦手だと思われていたのに市民係として授業前の地図当てをみんなの前でいつもきちんとやってくれたこと。気象の学習の発表の時に，内容的にも専門的にも優れた発表でみんなから絶賛されたこと。お別れ会の司会に，周りの子どもたちからの後押しはあったが，立候補したことなどである。

Ａ児の変容の要因の一つ目は，担当している学習分野で見せる姿を教師が語り合い，把握することによって児童理解がより深くなり，指導が的確にできた点が挙げられる。Ａ児について得た情報をそれぞれが違った場面で生かし，Ａ児に自信をもたせたり，やる気を出させたりするために生かすことができるようになったのではないだろうか。自分には見えていなかったよさや，知られざる一面を把握することは，自分の指導のあり方や子ども達への接し方を見直す機会になる。Ａ児の変容の二つ目

の要因として，Ａ児と周りの子どもたちとの関係が変わってきた点が挙げられる。昨年までのＡ児への先入観から「言葉を発しない。みんなの前ではしゃべれない。」と決めつけていた子ども達が，日々のＡ児の係活動，学習以外の場所で見せる彼のよさを発見し，認めることができるようになっていった。安心感のなかで自分らしさが出せるためには受容や共感の関係が重要であろう。また，得意なことを引き金にして，周りから尊敬されるような立場へと，関係性が組み替えられたのだとも考えられる。

**②教師への効果**

授業研究会の協議会で，「公共性」を育む方策を具体的に考え話しあうようになった。

**○発達の側面からもリテラシーを考える（１年生　ことばの授業）**

１年生では，自分がスピーチを話せたことの充実感や達成感はあっても，友だちが楽しんでくれることを期待して話している姿を感じることは，あまりなかった。だからこそ，聞くことへの指導が必要になってくるのである。「聞く」ことについてだけでも，発達の面からリテラシーについて考え直すべきことがあり，各学習分野部会でさらに協議する必要性を感じた。

**○他者を受け止めること　－自分と他者とをつなぐ言葉の大切さ－　（３年生　ことばの授業）**

友だちの発言に対して「付け足し」と発言することが話題になった。「付け足し」は，前者の発言を受けた上での「付け足し」か，あまり聴いていないことによる「付け足し」という発言なのか，それとも発言権を得るためのデモンストレーションなのか。改めて，他者の考えを理解した上で尊重し，他者と自分をつなぐ言葉を選んで発することの難しさと大切さを感じた。

**○能力差・経験差という「違い」のどのように考えるか　（４年生　からだの授業）**

個人の運動能力差を埋め，子どもたちが平等に参加できる題材開発に意味はある。しかし，子ども自身の能力差・経験差という「違い」を埋める「公共性」－例えば技能の低い子に「ドンマイ」と声かけができることーをどのように育てるのかが話題になった。教師は，能力差を埋めるだけでなく，子ども自身がどのように「公共性」を育みあえるのかを見通して，活動を考えることの重要性が課題になった。

以上のように，研究協議会では，授業中に見られた子どもの様々な姿から，「公共性」のある姿と言えるものや，「公共性」のない子どもの姿などを，価値づける話しあいになった。「公共性」を育て，それを支えるリテラシーを育むために，教師相互の「公共性」観の違いや，学習場面設定の仕方の違いを議論し，ある程度は共通理解することができたと言えよう。

**③　保護者等への効果**

保護者に対しては，研究開発学校として実践研究を進めることについて保護者会を通じて説明し，理解を求めてきた。保護者は概ね学年活動等へのボランティア参加に協力的で，研究実践への理解は高い。2008年12月には，保護者向けにアンケート調査（２年生・５年生向け）を実施した。

研究に関係のある設問（左下）と結果（右下－回収数は１９５通）は，以下の通りである。。

７．附属小学校は，研究活動（公開研究会の開催や大学との研究協力，出版活動など）を適切に行い，研究校としての使命を果たしている。

８．附属小学校は，文部科学省研究開発学校として，現行『小学校学習指導要領』にとらわれない特色ある教育活動を，それぞれの学習分野で工夫しておこなっている。

| 選　択　肢 | 設問７ | 設問８ |
|---|---|---|
| A　あてはまる | １４５ | １５８ |
| B　だいたいあてはまる | ３６ | ３２ |
| C　あまりあてはまらない | ２ | ３ |
| D　あてはまらない | ０ | ０ |
| 無記入 | ３ | ２ |

この結果を見る限りでは，保護者の本校の研究に対する理解は高いだろう。また，自由記述欄からも，子どもの姿を通して，本校の研究テーマについて，意識を高めていることが分かる。

○５年間お茶小に子どもを通学させることで，本当の自分の個性は何かを見つめ始めている点には驚かされるとともに，他者の個性を単一的な側面ではなく，複数の側面で評価し，認め合うことができるようになりつつある。まさに，自主協同の言葉通り，各々の個性とそれを認め合う力には感服する。

△道徳，規範意識の形成に注力してほしい。本校のホームページ内「平成21年度入学児童対象学校説明会Ｑ＆Ａ」にあるような，現在の社会や法・ルールに疑念を持ち自分たちで基準を設けて価値判断し，新たな公共性を創出する　人材を育成するのは，初等教育において上記意識・精神性を身につけた後の高等教育の役割だと思う。

○学校全体の教育に対する意識の高さを感じている。グループ単位の活動や発表を通じて，自分の意見を述べながら

も友達の意見を尊重し，互いに協力し合うことを覚えている様子がうかがえる。

**(2)　研究実施上の問題点と今後の課題**

**①「公共性」への教師の意識が高まった**

**成果**　授業設計には，民主主義を担う子どもを育てるという教師の意識（異なる他者を受けとめ，聴き　あう。共感や批判。葛藤場面を乗り越え，責任を果たすなど）がはっきり表れた。また，協力学年担　任制を母胎とし，発達段階を見通して，育てたい「公共性」考える姿勢も生まれてきた。

**課題**　それぞれの子どもの姿に応じて，違いを尊重しながら，関係性の変容を促す工夫や手だてを，明　らかにしていきたい。

**②教師が相互に学ぼうとする姿勢や連携の意識が高まった**

**成果**　今年度の授業研究では，子どもの姿・事実を語りあうことを重点にして，他の教師の「公共性」についての考え方を受けとめ，次にいかそうという姿勢が深まってきた。そして，「公共性」を育てるリテラシーの内容を子どもの姿から明らかにしようとした。

**課題**　教師同士がお互いに授業を見合い，様々な学習分野の視点から「公共性」を育てるリテラシーを　再考することが必要である。授業記録や画像記録の管理，事後研究会の開催など，授業の振り返りを　中心に，システムの構築を意識した校内研究の取り組みが必要である。

**③「公共性」を育むためのカリキュラムづくりと授業改善を進める**

**成果**　子どもたちに「公共性」を育むためには，じっくり他者と対話することを大切にすること。特に　聞く力を育てることは，本校の「公共性」と関わりが深いことが分かってきた。

**課題**　相互に認めあって安心感の中で聞きあえる場を確保して取り組むことが，全ての学習分野で必要　である。他者とは異なる自分自身を認識し表現する意識は育ってきているが，算数のパフォーマンス　・アセスメントの結果のように，自分の考えを分かりやすく，組み立てられるような思考力や，伝え　る（言語・非言語ともに）力の伸張は，全ての学習分野の課題である。また，中学年を核にして，発　達課題を意識した「公共性」の各学年段階における課題を明らかにする。

**④　学習分野の役割をさらに明らかにする**

**成果**　「公共性」を育むために，それぞれの学習分野が担う「リテラシー」が少しずつ，明らかになっ　てきた。

**課題**　今後は，『学びの概要』（「シティズンシップ教育」版）を作成し，小学校６年間の「公共性」を　育むための，シティズンシップの教育課程を明らかにしていきたい。なお，『学びの概要』について　は，名称を検討する予定である。

**⑤　研究開発としての研究テーマの意義について**

教育基本法第１４条に「政治的教養」の規定があるのだから，「公共性」や「シティズンシップ教育」は「研究開発」として妥当性があり，本校の課題は「政治的リテラシー」を核にして学習分野を再編成することだと，運営指導委員の先生から励ましの言葉をいただいた。さらに研究を深めたい。

**別紙１**

## お茶の水女子大学附属小学校　教育課程表（平成２０年度）

（※たたこ単位時間45分）

| 区分（学年・時期） | | | 週数 | 学習分野 ことば | 市民 | 算数 | 自然 | 音楽 | アート | 生活文化 | からだ | 創造活動（小1・2年は「なかま」） | 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 小6 | 接続前期 | 小中接続期前期 | 22 | 110 | 66 | 110 | 66 | 44 | 44 | 44 | 66 | 88 | 638 | 1015 |
| 小6 | 4月～7月 | | 13 | 65 | 39 | 65 | 39 | 26 | 26 | 26 | 39 | 52 | 377 | |
| 小5 | | | 35 | 175 | 105 | 175 | 105 | 70 | 70 | 70 | 105 | 140 | | 1015 |
| 小4 | | | 35 | 175 | 105 | 175 | 105 | 70 | 70 | | 105 | 175 | | 980 |
| 小3 | | | 35 | 175 | 105 | 175 | 105 | 70 | 70 | | 105 | 175 | | 980 |
| 小2 | | | 35 | 210 | | 175 | 70 | 52 | 52 | | 105 | 176 | | 840 |
| 小1 | 9月～3月 | | 22 | 132 | | 88 | 33 | 33 | 33 | | 66 | 99 | 484 | 770 |
| 小1 | 接続後期 | 5月GW明け～7月 | 13 | ことば・なかま・からだ・かずとかたち | | | | | | | | | 286 | |
| 小1 | 接続中期 | 4月～5月GW前 | | 286 | | | | | | | | | | |

別紙２

### 学校等の概要

**１　学校名，校長名**

オチャノミズジョシダイガクフゾクショウガッコウ
お茶の水女子大学附属小学校

校長　菅本晶夫（スガモトアキオ）

**２　所在地，電話番号，ＦＡＸ番号**

所在地　　東京都　文京区　大塚　２－１－１
電話番号　　０３（５９７８）５８７５　（教員室）
　　０３（５９７８）５８７３　（事務室）
ファクシミリ番号　０３（５９７８）５８７２

**３　学年別児童数，学級数**　（平成２０年１２月１日現在）

| 区　分 | 第1学年 | | 第2学年 | | 第3学年 | | 第4学年 | | 第5学年 | | 第6学年 | | 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 児童数 | 学級数 | 児童数 | 学級数 | 児童数 | 学級数 | 児童数 | 学級数 | 児童数 | 学級数 | 児童数 | 学級数 | 児童数 | 学級数 |
| 一般学級 | 120 | 3 | 117 | 3 | 118 | 3 | 117 | 3 | 115 | 3 | 115 | 3 | 702 | 18 |
| 帰国児童教育学級 | | | | | | | 12 | 1 | 13 | 1 | 9 | 1 | 34 | 3 |
| 計 | 120 | 3 | 117 | 3 | 118 | 3 | 129 | 4 | 128 | 4 | 124 | 4 | 736 | 21 |

**4　教職員数**　（平成２０年１２月１日現在）

| 校長 | 副校長 | 主幹教諭 | 教諭 | 養護教諭 | 栄養教諭 | 非常勤講師 | 実習助手 | ALT | スクールカウンセラー | 事務職員 | 司書 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | 1 | ２６ | 1 | 0 | (14) | 0 | 0 | （２） | (2) | (1) | ３０ (19) |

（　）は，非常勤職員数で外数